

セッション8

中学生の精神的健康及び欠席行動への影響要因としての 家族と養護教諭の対応

荒木田美香子

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

はじめに：静岡県8中学校の平成11年度の中学1年生1010名を対象に精神的不健康及び欠席行動の予測モデルの開発を目的として3年間の縦断的質問紙調査を行った。その結果、不登校生徒への対応の効果があること、ハイリスク群(HR群)に対して早期に対応することの必要性、及び1年次の自尊感情・首尾一貫感覚(特に把握可能感)の把握によりHR群を早期に把握し、対応をとることの可能性と重要性が示唆された。しかし、欠席行動については質問紙調査項目からは予測することは困難であったため、調査該当校の養護教諭に面接調査を行い、中学生の精神的健康及び欠席行動への影響要因と養護教諭などの対応状況を明らかにすることを目的に面接調査を実施した。

方法と対象：卒業までに関わった8校、8人の養護教諭に個別面接による聞き取り調査を行った。勤務校種はすべてが小・中学校の両方を経験し、経験年数は15年から35年であった。面接は文章化し、文脈単位でオープンコード化し467の一次コードを抽出の後、要約しカテゴリー化した。倫理的配慮として学校長と養護教諭に文書にて依頼し、調査協力の許可を得た後、目的と内容を説明し、録音の了解を得、承諾書への記入を得た。

結果と考察：中学生の精神的健康・欠席行動に影響する要因として、【子どもの要因】【家庭の場の要因】【学校の場の要因と対応】【地域の要因】が抽出された。【家庭の場の要因】は《子どもの混乱をうむ家族関係》《子どもの疲れをうむ家族関係》《簡単に欠席させてしまう家族の意識》《保護者の学校への協力》《3世代同居で弱者に優しい》の5カテゴリーが分類された。《子どもの混乱をうむ家族関係》では、＜夫婦間の話し合いが不足している＞状況や＜家庭内に心の居場所がない＞こと、＜再婚や夫婦仲の問題＞があげられた。また、＜子どもへの期待と甘やかしのアンビバレンツ＞といった保護者の相反する感情が子どもの精神的不健康や欠席の増加の要因であると指摘された。《子どもの疲れを生む家族関係》は母親と同様に学校でリーダーシップを出そうとして疲れてしまう＜活動的な親の投影＞、＜強すぎる家族の凝集性＞、＜子どもを大事にしすぎる親の態度＞があげられた。《簡単に欠席させてしまう家族の意識》は、＜簡単に休ませてしまう家庭の方針＞、＜欠席しても祖父母が見る＞状況も欠席が多くなる要因として述べられた。《保護者の学校への協力》は＜学校には協力的＞＜保護者がよく学校に来る＞ことがあり、子どもの精神的健康状態に良い影響を与えていた。【学校の場の要因と対応】は《学校の子どもの様子の観察》《欠席状況の確認》《連続欠席予防への関わり》《子供のグループダイナミクスへの関わり》《子どもの状態に応じた教師の関わり》《子どもに教師の考え方を伝える》《それぞれの役割を果たすための教師間ダイナミクス》《保護者に秩序をもたらす教師の関わり》《校内外システムの活用状況》等の10カテゴリーに分類され、家庭訪問の有効性が語られた。【子どもの精神的健康の向上に求められる対策】では《家庭へのアプローチ》《子どもへのアプローチ》《校内外のシステムの活用》の3カテゴリーに分けられた。《家庭へのアプローチ》は、＜家庭教育力を高める＞ことの実例として「養護教諭が地域の家庭教育学級に出向く」ことの実践や、＜親へのカウンセリング的関わり＞の必要性があげられた。

結論：中学生の精神的健康及び欠席行動には【家庭の場の要因】も大きく関与し養護教諭は地域の子どもの見守る態勢を活用しつつ家族への支援を行い、子どもの欠席行動に影響を及ぼしていることが明らかとなった。